夢殿

楠山正雄

青空文庫

一

むかし日本の国に、はじめて仏さまのお教えが、外国から伝わって来た時分のお話でございます。

第三十一代の天子さまを用明天皇と申し上げました。この天皇がまだ皇太子でおいでになった時分、お妃の穴太部の真人の皇女という方が、ある晩御覧になったお夢に、体じゅうからきらきら金色の光を放って、なんともいえない貴い様子をした坊さんが現れて、お妃に向かい、

「わたしは人間の苦しみを救って、この世の中を善くしてやりたいと思って、はるばる西の方からやって来た者です。しばらくの間あなたのおなかを借りたいと思う。」

といいました。

お妃はびっくりなすって、

「そういう貴いお方が、どうしてわたくしのむさくるしいおなかの中などへお入りになれましょう。」

とおっしゃいますと、その坊さんは、

「いや、けっしてその気づかいには及ばない。」

と言うが早いか踊り上がって、お妃の思わず開けた口の中へぽんと跳び込んでしまったと思

うとお夢はさめました。

目がさめて後お妃は、喉の中に何か固くしこるような、玉でもくくんでいるような、妙なお気持ちでしたが、やがてお身重におなりになりました。

さて翌年の正月元日の朝、お妃はいつものように御殿の中を歩きながら、お厩の戸口までいらっしゃいますと、にわかにお産気がついて、そこへ安々と美しい男の御子をお生みおとしになりました。召使いの女官たちは大さわぎをして、赤さんの皇子を抱いて御産屋へお連れしますと、御殿の中は急に金色の光でかっと明るくなりました。そして皇子のお体からは、それはそれは不思議なかんばしい香りがぷんぷん立ちました。

お厩の戸の前でお生まれになったというので、皇子のお名を厩戸皇子と申し上げました。後に皇太子にお立ちになって、聖徳太子と申し上げるのはこの皇子のことでございます。

二

さて太子はお生まれになって四月めには、もうずんずんお口をお利きになりました。明くる年の二月十五日は、お釈迦さまのお亡くなりになった御涅槃の日でしたが、二歳になったばかりの太子は、かわいらしい両手をお合わせになり、西の方の空に向かって、

「南無釈迦仏。」

とお唱えになったので、おつきの人たちはみんなびっくりしてしまいました。

太子が六歳の時でした。はじめて朝鮮の国から、仏さまのお経をたくさん献上してまいりました。するとある日太子は、天子さまのお前へ出て、

「外国からお経がまいったそうでございます。わたくしに読ませて頂きとうございます。」

とお申し上げになりました。

天皇はびっくりなすって、

「どうしてお前にお経が分かるだろう。」

とおっしゃいますと、太子は、

「わたくしはむかしシナの南岳という山に住んでいて、長年仏の道を修行いたしました。こんど日本の国に生まれて来ることになりましたから、むかしの通りまたお経を読んでみたいと思います。」

とお答えになりました。

天皇ははじめて、なるほど太子はそういう貴い人の生まれかわりであったのかとお悟りになって、お経を太子に下さいました。

太子が八歳の年でした。新羅の国から仏さまのお姿を刻んだ像を献上いたしました。その使者たちが旅館に泊っている様子を見ようとお思いになって、太子はわざと貧乏人の子供のようなぼろぼろなお姿で、町の子供たちの中に交じってお行きになりました。すると新羅の使者

の中に日羅という貴い坊さんがおりましたが、きたない童たちの中に太子のおいでになるのを目ざとく見付けて、

「神の子がおいでになる。」

といって、太子に近づこうといたしました。太子はびっくりして逃げて行こうとなさいました。日羅はあわてて履もはかず駆け出してお後を追いかけました。そして太子の前の地びたにぺったりひざをついたままうやうやしく、

「敬礼救世観世音菩薩。妙教流通東方日本国。」

と申しますと、日羅の体から光明がかっと射しました。そして太子の額からは白い光がきらりと射しました。日羅の言った言葉は、人間の世の苦しみを救って下さる観世音菩薩に、そしてこの度東の果ての日本の国の王さまに生まれて、仏の教えをひろめて下さるお方に、つつしんでごあいさつを申し上げますという意味でございます。

大きくおなりになると、太子は日羅の申し上げたように、仏の教えを日本の国中におひろめになりました。はじめ外国の教えだといってきらっていた者も、太子がねっしんに因果応報ということのわけを説いて、

「人間のいのちは一代だけで終るものではない。前の世とこの世と後の世と、三代もつづいている。だから前の世で悪いことをすれば、この世でその報いがくる。けれどこの世でいいことをしてその罪を償えば、後の世にはきっと幸福が報ってくる。だからだれも仏さまを信じて、

この世に生きている間たくさんいいことをしておかなければならない。」

こうおさとしになりますと、みんな涙をこぼして、太子とごいっしょに仏さまをおがみました。けれど中でわがままな、がんこな人たちがどうしても太子のお諭しに従おうとしないで、お寺を焼いたり、仏像をこわしたり、坊さんや尼さんをぶちたたいてひどいめにあわせたり、いろいろな乱暴をはたらきました。太子はその人たちのすることを見て、深いため息をおつきになりながら、

「しかたがない、悪魔を滅ぼす剣をつかう時が来た。」

とおっしゃって、弓矢と太刀をお取りになり、身方の軍勢のまっ先に立って勇ましく戦って、仏さまの敵を残らず攻め滅ぼしておしまいになりました。

こうしてこの太子のお力で、いろいろの邪魔を払って、仏さまのお教えがずんずんひろまるようになりました。摂津の大阪にある四天王寺、大和の奈良に近い法隆寺などは、みな太子のお建てになった古い古いお寺でございます。

三

太子のお徳がだんだん高くなるにつれて、いろいろ不思議な事がありました。ある時甲斐の国から四足の白い、真っ黒な小馬を一匹朝廷に献上いたしました。太子はこの馬を御覧に

なると、たいそうお喜びになって、

「この馬に乗って国中を一めぐりして来よう。」

とおっしゃって、調使丸という召使いの小舎人をくらの後ろに乗せたまま、馬の背に乗って、そのまますうっと空の上へ飛んでお行きになりました。下界では、

「あれ、あれ。」

といって騒いでいるうちに、太子はもう大和の国原をはるか後に残して、信濃の国から越の国へ、越の国からさらに東の国々をすっかりお回りになって、三日の後にまた大和へお帰りになりました。この時太子のお歩きになった馬の蹄の跡が、国々の高い山に今でも残っているのでございます。

またある時、太子は天子さまの御前で、勝鬘経というお経の講釈をおはじめになって、ちょうど三日めにお経がすむと、空の上から三尺も幅のあるきれいな蓮花が降って来て、やがて地の上に四尺も高く積りました。その蓮花を明くる朝天子さまが御覧になって、そこに橘寺というお寺をお立てになりました。

またある時、日本の国からシナの国へ、小野妹子という人をお使いにやることになりました。その時太子は妹子に向かい、

「シナの衡山という山の上のお寺は、むかしわたしが住んでいた所だ。その時分いっしょにいた僧たちはたいてい死んだが、まだ三人は残っているはずだから、そこへ行って、むかしわた

しが始終つかっていた法華経の本をさがして持って来ておくれ。」

とおっしゃいました。

妹子はおいいつけの通り、シナへ渡るとさっそく、衡山という所へたずねて行きました。そしてその山の上のお寺へ行くと、門に一人の小坊主が立っていました。妹子がこういう者だといって案内をたのみますと、小坊主はもう前から知っているといったように、

「和尚さん、和尚さん、思禅法師のお使いがおいでになりましたよ。」

といいました。するとお寺の中から腰の曲がったおじいさんの坊さんが三人、ことこと杖をつきながら、さもうれしそうにやって来て、太子の御様子をたずねるやら、昔話をするやらしたあとで、妹子のいうままに、一巻の古い法華経を出して渡しました。妹子はそれを持って、日本へ帰ったということです。

四

太子のお住まいになっていたお宮は大和の斑鳩といって、今の法隆寺のある所にありましたが、そこの母屋のわきに、太子は夢殿という小さいお堂をおこしらえになりました。そして一月に三度ずつ、お湯に入って体を浄めて、そこへお籠りになり、仏の道の修行をなさいました。

ある時太子はこの夢殿にお籠りになって、七日七夜もまるで外へお出にならないことがありました。いつもは一晩ぐらいお籠りになっても、明日の朝はきっとお出ましになって、みんなにいろいろと尊いお話をなさるのに、今日はどうしたものだろうと思って、お妃はじめおそばの人たちが心配しますと、高麗の国から来た恵慈という坊さんが、これは三昧の定に入るといって、一心に仏を祈っておいでになるのだろうから、おじゃまをしないほうがいいといって止めました。

するとちょうど八日めの朝、太子は夢殿からお出ましになって、

「先だって小野妹子の取って来てくれた法華経は、衡山の坊さんがぼけていたと見えて、わたしの持っていたのでないのをまちがえてよこしたから、魂をシナまでやって取って来たよ。」

とおっしゃいました。

その後また小野妹子が二度めにシナへ渡った時、衡山のお寺を訪ねると、前にいた三人の坊さんの二人までは死んでしまって、一人だけ生き残っておりましたが、その坊さんの話に、

「先年あなたのお国の太子が青い龍の車に乗って、五百人の家来を従えて、はるばる東の方から雲の上を走っておいでになって、古い法華経の一巻を取っておいでになりました。」

と言ったそうでございます。

五

太子のお妃は膳臣の君といって、それはたいそう賢くてお美しい方でしたから、御夫婦のお仲もおむつましゅうございました。ある時ふと太子はお妃に向かって、

「お前とは長年いっしょにくらして来たが、お前はただの一言もわたしの言葉に背かなかった。わたしたちはしあわせであったと思う。生きているうちそうであったから、死んでからも同じ日に、同じお墓の中に葬られたいものだ。」

とおっしゃいました。お妃は涙をお流しになりながら、

「どうしてそんな悲しいことをおっしゃるのでございますか。このさき百年も千年も生きていて、おそばに仕えたいと、わたくしは思っているのでございますのに。」

とおっしゃいました。けれども太子は首をおふりになって、

「いやいや、初めがあれば終りのあるものだ。生まれたものは必ず死ぬに極まったものだ。これは人間の定まった道でしかたがない。わたしもこれまでいろいろのものに姿をかえ、度々人間の世に生まれ変わって来て、仏の道をひろめた。とうとうおしまいにこの日本国の皇子に生まれて来て、仏の道の跡方もない所に法華の種を蒔いた。わたしの仕事もこれで出来上がったのだから、この上永く、むさくるしい人間の世の中に住んでいようとは思わない。」

としみじみとお話をなさいました。お妃はなおなお悲しくおなりになって、とめ度なく涙がこぼれて来ました。

ちょうどそのころでした。太子は摂津の国の難波のお宮へおいでになって、それから大和の京へお帰りになるので、黒馬に乗って片岡山という所までおいでになりますと、山の陰に一人物も食べないとみえて、見るかげもなく、痩せ衰えたこじきが、虫のように寝ていました。お供の人たちは、太子のお馬先に見苦しいと思って、あわてて追いたてようとしますと、太子はやさしくお止めになって、食べ物をおやりになり、情けぶかいお言葉をおかけになりました。そして帰りしなに、

「寒いだろうから、これをお着。」

とおっしゃって、召していた紫色の御袍をぬいで、お手ずからこじきの体にかけておやりになりました。その時、

「しなてるや
片岡山に
飯に飢えて
臥せる旅びと
あわれ親無し。」

という和歌をお詠みになりました。

「しなてるや」というのは、片岡山という言葉に冠せた飾りの枕言葉で、歌の意味は、片岡山の上に御飯も食べずに飢えて寝ている旅の男があるが、かわいそうに、親も兄弟もない、か

なしい身の上なのであろうかというのです。

するとその時、寝ていたこじきが、むくむくと頭をあげて、

「斑鳩や
富の小川の
絶えばこそ
我が大君の
御名を忘れめ。」

と御返歌を申し上げたといいます。

歌の中にある「斑鳩」だの、「富の小川」だのというのは、いずれも太子のお住まいになっていた大和の国の奈良に近い所の名で、その富の小川の流れの絶えてしまうことはあろうとも、太子さまの今日のお情けをけっして忘れる時はございませんというのでございます。

さて太子は奈良の京へお帰りになりましたが、その後で片岡山のこじきは、とうとう死んでしまいました。太子はそれをお聞きになって、たいそうお嘆きになり、手あつく葬っておやりになりました。それを聞いた七人の大臣が、太子さまともあるものがそんな軽々しい事をなさるとはといって、やかましく小言を申しました。太子はその話をお聞きになると、七人の大臣を呼び出して、

「お前たちはそんなむずかしいことをいっていないで、まあ片岡山へ行ってごらん。」

とおっしゃいました。

大臣たちはぶつぶつ言いながら、ともかくも片岡山へ行ってみますと、どうでしょう、こじきのなきがらを収めた棺の中は、いつか空になっていて、中からはぷんとかんばしい香りが立ちました。大臣たちはみんな驚いて、太子も、このこじきも、みんなただの人ではない、慈悲の功徳を世の中の人たちにあまねく知らせるために、尊い菩薩たちがかりにお姿をあらわしたものだろうと思うようになりました。

六

さてこのことがあってから後間もなく、太子はある日お妃に向かい、

「いよいよ、いつぞやの約束を果たす日が来た。わたしたちは今夜限りこの世を去ろうと思う。」

とお言いになりました。

そして太子とお妃とはその日お湯を召し、新しい白衣にお着替えになって、お二人で夢殿にお入りになりました。

明くる日の朝、いつまでもお二人ともお目ざめにならないので、おそばの人たちが不思議に思って、そっと御堂の中に入ってみますと、お二人はまくらを並べたまま、それはそれは安ら

かに、まるでいつもすやすやお休みになっているような御様子で、息を引き取っておいでになりました。お体からはぷんと高く、かんばしいにおいが立ちました。太子のお年は、四十九歳でございました。

太子のおかくれになった日、シナの衡山からとっておいでになった古い法華経も、ふと見えなくなりました。それもいっしょに持っておいでになったのだろうということです。

青空文庫情報

底本：「日本の英雄伝説」講談社学術文庫、講談社
1983（昭和58）年6月10日第1刷発行
入力：鈴木厚司
校正：今井忠夫
2004年1月6日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

夢殿

楠山正雄

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/